子どもの自尊感情を高める授業実践の研究

—通常の学級における特別なニーズを要する子どもへの支援を基盤として—

高度学校教育実践専攻　　実習責任教員　川　上　　綾　子
授業実践・カリキュラム開発コース　　実習指導教員　小野瀬　　雅　人
石　橋　　恵　美

第１章 課題分析

第１節 課題設定理由

近年，子どもたちの自己肯定感や自尊感情の低さが問題となっている。また，質問紙調査や実態調査等の学校アセスメントの結果から，置籍校においても，通常の学級で子どもの個人差に対応した授業を行い，子どもが自信をもって学校生活を送ることができるようにすることが課題であると考えられた。そこで，本研究では，通常の学級における特別なニーズを要する子どもへの支援を基盤とした授業を通して，どの子にも「わかる喜び」「できる楽しさ」を実感させることで，子どもたちの自尊感情を高めることができるのではないかと考え，それをめざした授業実践に取り組んだ。

第２節 先行研究

１ 自尊感情

自尊感情は，さまざまな研究者により定義付けがされている。本研究においては，学校現場での共通理解を得やすいよう，教師たちの思いや考え方に比較的近い，荒木（2011）の定義を参考に「子どもが自分を価値ある存在としてとらえることによる態度と感情」と考える。

２ 学業的自己概念と学業達成

本研究は，蘭（1989）が作成した「子どもの自己概念理解のための枠組」の考えにたち，授業での教師の支援や手だてによって子どもの学業達成の機会をつくり，それにより好ましい学業的自己概念を形成し自尊感情を高めることを目的とする。

ここでの学業達成とは，テストで点数化できるものだけを指すのではなく，学習の理解，授業や学習活動についての達成感，意欲，肯定的な内的フィードバックという循環による，授業や学習に対する子ども自身の満足感を含めて学業達成と考える。

３ 自尊感情の形成と授業

櫻井（2011）は，「勉強に対する自信は，個々の学習場面における自信によって形成されるのであり，日常的な学習場面での対応が重要である。」と述べ，子どもの自尊感情の形成に及ぼす授業の重要性を指摘している。また，白川(2011)は，子どもの活動を主体とした授業の導入が，子どもの実質的な自尊感情の上昇につながるとはいえないことを示しており，子どもの活動が中心の授業こそが自尊感情を高めるという，学校現場で見られがちな考えを見直す必要がある。

第３節 課題解決のためのアプローチ

１ 置籍校の子どもの学業達成に関する意識

子どもたちにとって，「学業達成の実感」とはどのような場面で得られるのかを把握するために調査を行った。上位の３項目は，「計算が正し

くできたとき」,「漢字が読めたり書けたりしたとき」,「テストの結果がよかったとき」だった。発展的な内容よりも基礎的な内容の回答が多い。自由記述の方法を用いた調査では,「先生や家族からほめられる」という内容が多かった。

これらのことから,「他者からのよい評価」,「わかりやすい成果」,「自己の能力の確認」が,子どもにとって,学業達成の実感を得られる要素であると考えた。

2 通常の学級における特別なニーズを要する子どもの支援

文部科学省が行った「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」によると,知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合は,小学校において,7.7%(推定値)となっている。

置籍校においても,学校アセスメントによる結果から,全体的な発達の遅れや発達のバランスの悪さが見られる子どもが,約22%となっている。しかし,学校生活の中で何らかの支援を受けている子どもは,そのうちの4%である。

本研究においては,残りの18%に含まれる子どもを特別なニーズを要する子どもととらえ,この子どもたちへの支援を基盤とした手だてを考えていく。

3 言語障害通級指導教室での実践事例

「一人一人の実態に合わせた学習」を行っている置籍校の言語障害通級指導教室の実践は,通常の学級に在籍する特別なニーズを要する子どもへの支援や手だての参考になると考え,調査を行った。

その結果,次のようなことがわかった。

教師が個のつまずきに合わせた教材を作成・使用し,明確なねらいをもった指導が行われている。また,学習活動の内容や流れが分かりやすくなるようにし,子どもが安心感をもって学習に取り組めるように配慮をしている。さらに,教師主導とならないように,子どもが自分の学習する内容に対して自己選択・決定ができる場を保障していた。

4 課題解決のためのアプローチ

置籍校の子どもの学業達成に関する意識の調査結果や言語障害通級指導教室での調査から,筆者は授業設計において,①学習活動や学習内容の可視化と進捗状況の可視化,②自己選択・自己決定の場の設定,③学習活動の効率化と子どもの負担感の軽減,④教師の肯定的態度,の4点を授業設計の方針とした。授業設計及び学習活動での支援や手だてを考えるにあたっては,④教師の肯定的態度は授業を支える理念とした。

第2章 課題解決

第1節 実践研究の目的と方法

1 目的

通常の学級に在籍する特別なニーズを要する子どもに焦点を当てた支援や手だてを行うことにより,すべての子どもたちの学習への自信をもたせるとともに自尊感情を高めることを目的とする。その検証を通し,自尊感情を高めるための授業の支援や手だてについての条件を明らかにする。

2 方法

学習活動や学習内容の可視化と進捗状況の可視化,自己選択・自己決定の場の設定,学習活動の効率化と子どもの負担感の軽減を具体化した支援や手だてを取り入れた授業の開発を行う。

実践授業と学業達成の検討は,質問紙調査及び単元別テストを実施する。自尊感情の変容は,桜井(1992)による児童用コンピテンス尺度の

自己価値尺度と学習コンピテンス尺度の質問紙を用いて調査を行う。

第２節 実践研究の実施

１ 学校課題フィールドワークⅠの取り組み（以下，フィールドワークはＦＷと略す）

2012年５月に国語科「学級新聞を作ろう（全11時間）」，2012年６月に算数科「式と計算の順じょ（全９時間）」の授業を行った。

特別なニーズを要する子どもへの支援を基盤とした手だてとしては，次のことを行った。

①学習活動や学習内容の可視化と進捗状況の可視化については，両教科とも，授業のユニット化，ワークシートの活用（学習の流れの可視化，ノートのシステム化，手順の明示，モデルの提示）を行った。

②自己選択・自己決定の場の設定は，国語科では，題材・取材・掲載写真の自己決定を取り入れた。

③学習活動の効率化と子どもの負担感の軽減では，ＩＣＴ機器を活用した視覚教材を活用し，学習内容の理解，思考のイメージ化，ヒントの提示等を行った。

２ 学校課題フィールドワークⅠの結果と考察

学業達成の結果は，平成24年３月に調査した単元別テストの結果と比較すると，両教科とも到達度の平均値は６～８点増えていた。また，単元目標への達成を問う自己評価の結果は，国語科，算数科とも良好であった。

自尊感情の尺度の数値に大きな変化は見られなかった。しかし，子どもの自己評価の結果は高く，自由記述の内容からも達成感や意欲の向上が見られた。これらのことから，継続して学習に対する子どもの自分への評価を高めると，自尊感情も高めていくことができるのではないか，と考えられる。

学校課題ＦＷⅡに向けては，前述の①～③の授業設計上の手だての改善に加え，研究上の課題として，個々の支援や手だてが子どもの自尊感情や学業達成にどのように関係しているのか，ということについて検討を行う必要性が示された。

３ 学校課題フィールドワークⅡの取り組み

2012年10月に，国語科「点（、）を打つところ（全２時間）」，算数科「学びをいかそう 見積もりを使って（全１時間）」，「学びをいかそう どんな計算になるのかな そのわけもいいましょう（全１時間）」の授業を行った。

①学習活動や学習内容の可視化と進捗状況の可視化については，両教科とも，学校課題ＦＷⅠの手だてに加え，「授業の進め方の資料」の提示を行った。

②自己選択・自己決定の場の設定は，これを「自力解決の場」ととらえることにした。そして，時間の確保と活動内容の子どもへの周知を行った。さらに，ＩＣＴ機器を活用し，自力解決のための支援をした。

③学習活動の効率化と子どもの負担感の軽減では，学校課題ＦＷⅠの手だてに加え，視覚教材では，解法の手順の明示と重要事項の焦点化を行った。また，視覚教材とワークシートとの対応については，学校課題ＦＷⅠよりもさらに考慮し，ワークシート・視覚教材・板書の内容を同一にし，子どもの学習活動がスムーズになるようにした。

４ 学校課題フィールドワークⅡの結果と考察

授業前と比較して，国語科，算数科の授業終了時とも，自己価値尺度，学習コンピテンス尺度の得点は，わずかに上昇している。学業達成の結果は，両教科とも，平成24年３月の結果より数値が上がっており，学校課題ＦＷⅠの結果

と同じ程度となっている。

前項①～③の手だてについては，授業の進め方の資料の提示，自力解決の時間，視覚教材，ワークシートのいずれにおいても，子どもたちからは「自分の学習に役に立った」という肯定的な評価が多かった。

抽出した子どもの事例からは，自尊感情を高めるためには，授業において，子どもが「わかった，できた」という達成感や安心感をもつことが必要であり，そのために行った今回の支援や手だては効果があったことがわかった。

第３章 成果と課題

第１節 成果

１ 自尊感情と学業達成

自己価値尺度と学習コンピテンス尺度の間には強い相関があったことから，学習コンピテンスを上げることにより自己価値も上げることができるのではないかと考えられ，授業において教師の支援や手だてにより学習コンピテンスを高め，その過程を重ねることで全般的な自尊感情の向上につなげるという，本研究の考え方は妥当であることが確認された。

また，単元別テストと自尊感情尺度得点との相関はあまりなかった一方，自尊感情が大きく上がった子どもの事例に共通していたのは，授業中の成功体験に対する満足感や充実感だった。これは，子どもの自尊感情には，単元別テストの結果よりも，授業での成功体験に伴う学業達成の実感の方が，大きく影響をすることを示唆している。

２ 特別なニーズを要する子どもへの支援を基盤とした手だて

特別なニーズを要する子どもへの支援を基盤とした手だて①～③について必要な条件としては，それぞれ次のことが挙げられる。

①学習活動や学習内容の可視化と進捗状況の可視化においては，授業の進め方を見ることができる，学習活動として今何をすべきかが分かる，学習活動の順序が分かる，学習活動の時間が分かる，ことが必要な条件である。

②自己選択・自己決定の場の設定においては，取り組みに十分な時間が確保されている，「自分で解決する」ということが明確で，それを子どもが理解している，子どもが少し難しさを感じつつも解決可能な内容・課題である，ことが必要な条件である。

③学習活動の効率化と子どもの負担感の軽減に関する視覚教材においては，文字や絵が大きく見えやすい，提示する情報が整理されている，必要な情報のみを提示する，子どもにとって見ていて楽しい内容であること，また，ワークシートにおいては，どこに何を書くかがわかりやすい，学習のまとめとして使える，授業の進め方に沿っている，提示資料や板書と対応している，子どもが読みやすい文字や書きやすい記入欄の大きさであること，が必要な条件となる。

第２節 課題

本研究で実践した授業は，限定的ではあるものの一定の成果があったと考える。しかし，単発的な授業では，その効果に限界があり，自尊感情尺度の大きな変容までには至らなかった。自尊感情を高めていくといった目的のためには，当然ながら継続的な取り組みが重要である。

また，本研究では触れることができなかったが，子どもたちの安心感や満足度が高くなるような学級づくりも，子どもの自尊感情を高めるためには重要であり，今後その検討にも取り組んでいきたい。